

エコたま



グリーン NEWS

多摩市民環境会議機関紙 第105号(通巻第165号)
2013年8月1日発行 発行人:清水武志朗 編集人:
井上ひさかず 〒206-0025 多摩市永山 3-9 東永山
複合施設 301 tel&fax 042-376-4572(事務局員は常
駐しておりません) e-mail qqh43td@train.ocn.ne.jp
URL <http://ecomeetingtama.biog.ocn.ne.jp>

えっ、公民館や図書館が減らされるの!?

「多摩市の公共施設のこれから」説明会開催



みなさんご存知のように、本市は多摩ニュータウンの建設により昭和40年代以降、入居が続いて人口が急増。それにより、各種社会インフラとともに、学校を始めとする各種公共施設がつぎ

つぎに整備されていった。ひじり館の説明会に市民60名が参加

このこと自体は住民サービスとしてけっこうなことで、われわれも現在の多摩市の各種行政サービスにより、他市の市民より快適な生活と、良好なコミュニティ、環境のなかで暮らしているのではないかとの実感はある。

ところが、やはり世の中、そんなによいことばかりが長続きはしない。建設から40~45年がたち、今後それら各種公共施設が更新や建て替えの時期を迎える。それも、長期間かけて順々にやっていくわけではなく、整備したのが短期間だったから、更新などもほとんど同時期に行わねばならない。こういった、この自治体ならではの

キレス腱があることも避けて通れない問題なのだ。

すべての施設を改修すると費用は今後10年間で約200億円かかるとの試算もあり、持続可能な今後の多



小さな児童館は集約されてしまう 摩市のことを見通すと、現在の公共施設をそのまま維持していくことはまず不可能ということになる。今後その施設をどう維持していくのか、あるいは削減せざるを得ないのか、市の担当部署(企画政策部)がまとめた「公共施設のこれから」に関する市民説明会が7月下旬、市内5カ所の会場で行われた。

本紙はこの3回目のひじり館ホール(7月26日)で行健康センターは再配置される われた説明会に出席。



最初は阿部裕行市長自ら説明に立ち、パワーポイントを用いて「(仮称)公共施設の適正配置に関する行動計画」についてを語った。

過去の多摩市だと、ニュータウン開発による人口増、それによる市税などの増収で、公共施設の整備が進められてまちが活性化して



東永山複合施設は売却予定

いった。ところが、現在は高齢化率23%で4人から5人が高齢者という社会。それも全国平均を上回るスピードで高齢化率が上昇している。

そしてきびしい財政の見通し。先行き不透明の景気と雇用情勢。少子高齢化による税収の減少。さらに短期間に集中的に整備してきた公共施設がつぎつぎに老朽化。これによって多額の大規模改修費が必要になる。このままでは多摩ニュータウンがオールドタウン化し、まちは衰退していくばかりになってしまう。

そんな課題への対応として、①多摩ニュータウンの再生(例:諏訪2丁目住宅の建て替え事業)、②多摩市行財政刷新計画で行財政改革を総合的に推進、③公共施設の適正配置に関する行動計画で、公共建築物に関わる費用と事業について、施設の統廃合や民間活力の導入などを通じた見直しを実施する。

たとえば、人口14万数千人の多摩市には図書館が7館あるが、人口50万人の八王子市には5館しかないそうだ。そんなこんなで、公共施設の縮減は今後の市の状態からは必ず行わなければならない施策である、との主張だ。

その後は同部の資産活用担当の佐藤稔課長による数字的な説明に移ったが、たとえば平成26年度~27年度に統廃合による効果額として0.3億円、手法の改善による効果額として0.5億円の計0.8億円。平成28年度~35年度の上記2件の効果額として約51.4億円との説明があったが、本紙ではこの「統廃合による」と「手法の改善による」が抽象的で意味がわからず、もっと具体的な説明がほしいと促したものの、同課長からは「まだ案の段階なので」と明確な返事はなかった。しかし、具体的な意味も説明せず、自分たちがはじき出した数字をもって市民を納得させることなどできるのだろうか。

具体的には2館ある公民館を1館にしてしまうとか、分散型図書館を集約型にするとか、児童館なども「子どもたちが歩いて行ける距離への集約」なども含まれているようだ。しかし、この段階ではまだ「案」。

この説明会だけでは納得できないことだらけ。願わくば、この市民説明会が市として「段階を踏んで市民には十分に理解してもらいました」など、まち

がっても既成事実の言い訳には使ってほしくないものだ。(←壁がはがれた公共施設のトイレ)

このあと8月は7日まで市民説明会が行われ、1日から20日までパブリックコメントの受付、9月に行動計画の最終案の作成(予定)、10月に行動計画の決定(同)とスケジュールが組まれている。そんなに急いでどこに・・・



太陽光発電(再生エネ)の総合ショー開かる

一般社団法人太陽光発電協会の主催する<PV JAPAN2013>が7月24日~26日まで、江東区の東京ビッ



ユニークなブース展示を行う企業

増え、それだけ各出展者がビジネスに力を入れていることを示している。

今回の展示では、日本の再生可能エネルギーの固定価格全量買い取り制度が昨年7月から始まったことを受け、国内のメーカーはともかく、外国メーカー、関連製品メーカーの出展も多く、それだけ国際色が豊かになってきているし、大学や専門校、社団法人、NPOなどが出展する「アカデミックギャラリー」も40近い出展者があり、ビジネスとは一線を画した学術的な発表を行っていた。



会場は最終日までにぎわった

再生エネが産業としてすぐ裾野が広がってきていることを実感させるショーでもある。

外国メーカーが太陽光パネルで安値攻勢をかけてきている現在、迎え撃つ日本メーカーは、パネルそのものより保守などの面で独自の新機軸を打ち出し、業界最大手のシャープなどは、メガソーラー（大規模太陽光発電所）などでパネルの性能劣化を解消するお掃除ロボットを出展していた。これによって、人件費を削減できるというのが売りが、パネルのブロック間をどう移動させるのかは、聞きそこなった。



シャープのパネル掃除ロボット

グサイトで開かれた。今回の出展者は185社・団体、出展国・地域は10。（昨年は8国・地域、196社・団体）ただ、小間数は昨年の485から579に増え、それだけ各出展者がビジネスに力を入れていることを示している。

また、カナダ、フランス、イタリア、南アフリカなど国や大使館単位での出展もあった。これらの国がいかにかに日本市場を重視しているかの表れとみていいだろう。

パネル製造だけでなく、架台メーカーや屋根への取り付け具、素材メーカーなど、再生エネが産業としてすぐ裾野が広がってきていることを実感させるショーでもある。

農村を健全にすることこそ日本再興の道

「森・土・海は 食のゆりかご 命のゆりかご」の2回目は、山地酪農家の中洞（なかほら）正さん。1984年から岩手県岩泉町の中山間地で牛の野芝飼育、完全自然放牧をコンセプトとする山地酪農場を運営。農薬や肥料とは無縁の自然循環型の酪農を実践し、山地酪農および放牧牛による山林管理手法の普及をめざしている。東北アントレプレナー大賞（2003年）、東京農業大学経営者大賞（2005年）など受賞。以下、中洞さん（下写真）の話。

農大の学生の時に、日本の四国でスイスの山のような放牧をやっている記録映画を見て、こんなことが日本でもできるんだと感動した。

山地酪農が飼料として利用する野芝は、日本に昔から自生する草資源で、無農薬、無施肥、まさに太陽と雨と月の恵みだけで育つ。ほふく茎で伸びていくため、繁殖力、土壌安定力、保水力が高いことが



特徴。（→山地酪農）

また、林間放牧によって牛が間伐や枝打ち作業



の妨げになる森林の下草も食べてくれるため、山作業の軽減、ひいては国土の保全につながる。畠山さんの「海と鉄」の話を知って、「安心の食」を提供する責任だけでなく、放牧でも土と山を守ると大きな責任を感じている。

スーパーマーケットなどで売っている「〇〇3.5牛乳」というのは、本物の牛乳ではない。なぜなら、バターや生クリームは牛乳からつくるが、スーパーで売っている牛乳からはできないからだ。日本の牛乳は真白だが、なぜかというとい草を食べさせないから。青い草を食べさせるともっと黄色くなる。

海外から来た人が自分の牧場産の牛乳を飲んで「こんなおいしい牛乳、日本に来てから初めて飲んだ」という。そして「日本人はなんであんなにまずい牛乳を飲んでるんだ」ともいう。学校給食では、子どもたちが、飲まないといじめられたり、先生に叱られたりするからまずい牛乳でも飲んでる。

狭い牛舎で、いつも同じ姿勢をとらされて飼料を与えられて食べている牛は、ストレスにさらされながら乳を搾られている。EUでは、健康な家畜をつくるのが国民に健全な食料を供給することになる。それこそが畜産なんだと、ちゃんとわかっている。

日本の里山は荒れているから、限界集落では高齢者が田畑の仕事を生きがいに暮らしているのに、一夜にしてクマやイノシシに荒らされてしまう。当牧場では間伐材を置いておくと、牛が広葉樹の葉をみんな食べてしまう。

日本の農業従事者の平均年齢は59.8歳。日本の農業はすでに崩壊しつつある。業界は既得権益を守ることに奔走している。そんな業界の外に出たわたしのような人間は「アウトサイダー」と呼ばれ、補助金は受けられないし、融資の貸しはがしまでされる。

戦後、日本の経済成長を支えたのは地方出身の集団就職者たちだった。地方で育って健全な精神と健全な体を持った元気な青年層が日本をつくった。だから、おなかを減らし、よく食べ、よく眠る。これができる国にして、第一次産業の若者たちを育てよう。彼らが日本を救う。

日本を今後、健全にしていくためには農村の若者たちの水準を常に一定に保っておく必要がある。これを実現させることが日本再興の道になると思う。

多摩市まち美化キャンペーン日程

多摩市まち美化推進協議会では、8月下旬に今年度第1回目の「まち美化キャンペーン」を行う。日程は――

- ・8月26日（月）唐木田駅周辺
- ・8月27日（火）多摩センター駅周辺
- ・8月28日（水）永山駅周辺
- ・8月29日（木）聖蹟桜ヶ丘駅周辺

時間はいずれも16時から17時まで。夏休み中なので、多くの小中学生の参加も予想される。当会議会員もこぞって参加してほしい。

